■文化史の窓⑩■

歴史の恐れ、あるいは歴史家の業（ごう）

――山内昌之『ラディカル・ヒストリー』を読む

大江　一道

ユーラシア大陸において進行する目くらむような歴史の崩壊、国家の解体を、いま、私たちは目撃している。もはや「ソ連史」は、かつて存在し、いまは非在となった国家史以外のものではなくなった。ハムレットの有名なセリフ――to be, or not to be, that is the question を、明治七年の『イエロー・ヨコハマ・パンチ』は、「アリマスカ・アリマセンカ・アレハナンデスカ」と訳したのだそうな。目下のソ連の終焉にあたってつぶやく独白としては、その後のお歴々の名だたる訳文よりもはるかにつよいリアリティをこの訳文は伝えている、といえないだろうか。

一九九一年、このロシア史の大転換をめぐって、最もあざやかな議論を展開したひとは山内昌之氏であろう。これまでも『現代イスラム』『スルタンガリエフの夢』などの話題作を次々に発表してきた少壮学者山内昌之氏は、この年、年頭に『ラディカル・ヒストリー』（中公新書）を著した。副題に「ロシア史とイスラム史のフロンティア」とある。

「ラディカル・ヒストリー」という名称は、著者によれば、ある特定の方法を〈方法（アド・ホック）として〉開示することをめざすのではなく、地域の枠組や民族のコンセプトを見直し、具体的な歴史叙述の試みを通して変化する現実の世界をとらえようとする志の象徴であるという（「あとがき」より。傍点は引用者）。何がラディカル（根底的な）であるかは、「序章―輪郭」の全七章と終章の構成を語るなかで述べられているのだが、一言でいえば、イスラム＝アジアの側からの、ロシア・ソ連「帝国」征服史観を撃つ、根底的な批判の歴史書であるといえるだろう。

ソ連は消滅した。代わって登場しつつある国家の枠組は、多民族のゆるやかな複合体の「独立国家共同体」である。スラブ＝ロシアの軍事征服によって統括・支配されてきた一二〇以上もの民族集団は、いま自立をめざす再生のドラマを世界に現前させている。

『ラディカル・ヒストリー』の第二章は「征服」と題される。歴史の暗い記憶を引きずるロシア・ソ連「帝国」の民族問題の、原初に向かう探究である。ここでフィールドとされるのは、ヴォルガ中流域のカザンであり、一六世紀、モスクワ国家のイワン雷帝によるカザン征服事件である。このカザン征服がロシア史に書き込まれるとき、そもそも史料とは何か、という重大問題にひとは遭遇するはずである。征服者がロシア語によって記した年代記史料は、文明的使命感をもって「歴史の正当化」を企てる行為にほかならない。征服されたタタールの側に光をあてて征服した民族の権道と偏見を突き破るにはいかなる方法が必要であろうか。

山内氏は、ここで『ラディカル・ヒストリー』の志に必要なのは、「想像力の駆使」であると述べる。その駆使のために用いるのは、トルコ文学史ではダスタンという〈口誦化された歴史叙述〉、口伝えで伝承された文学的作品であるタタールの叙事詩

『チョラ・バトゥル』である。これは、一般的な言い方に直せば、歴史家は文学作品をどう扱うべきか、という問題になる。征服期のモスクワ=カザン関係は、タタール語で書かれた同時代史料としては、この反ロシアをあらわに示す『チョラ・バトゥル』を除くと皆無にひとしいのであるから（だからこそ、ロシア帝国はその存在を何度も抹殺しようとしたという）、説話の虚構性にあえて挑戦して歴史的世界を捉え直す必要が生じてくるのだ。

叙事詩『チョラ・バトゥル』から、一六世紀カザンに関するロシア・ソ連「帝国」官許の歴史の偽造を暴いていく、山内氏による想像力の駆使が本章に示されているわけであるが、本章に刺激された作家五木寛之氏の山内氏との対談も、なかなかに興味ぶかいものである（『歴史読本ワールド　特集ロシア帝国の興亡』一九九一年十一月号）。

五木氏は、この『ラディカル・ヒストリー』に、二つの中心点をもつ楕円史観を読み取って共鳴し、自らの五木史観に引き寄せて、二つの中心点というのを、世界には歴史を残す種族と、歴史を消す（残さない）種族の二つがあって、「この二つの種族が二つの中心点をもつ楕円のような形で運動し合いながら人間の歴史はつくられてきたと思うわけです」といっている（同誌二七頁）。つまり、定住民は歴史を残すが、遊牧民や山人は歴史を残そうとしない、何か物語や伝承というものを持っていたとしても、それは口伝えでしか残さないはずだ、というわけである。

すでに赤坂憲雄氏は、『山の精神史』（小学館）において、山人の世界に背を向けること（転向）によって、日本民俗学を成立させた柳田国男の発生の問題を、丹念なテクスト批判を通じてするどくえぐっている。これは、山内氏の仕事と本質において通底する作業であろう。

五木寛之の「我々の無限の想像力の中で、一方では反歴史というものがあるんだということを予感しながら歴史を見ていくことによってしか、歴史はあり得ないと思う」という言葉は、歴史をなりわいとする者にズシリと重くのしかかる。歴史学は史料なしには成り立たないが、その史料には、つねに、偽造ばかりか非在の問題がつきまとう。それをおしてあえて歴史を書く、語るには、恐れと罪の意識を持つことなしには不可能ではないか、と。また、科学的な学問研究であれ、想像力の駆使の世界に遊ぶ文学であれ、所詮は業なんだという自覚がないとダメなのではないか、と。

少くとも山内氏はこの痛みの自覚を持っている。だからこう語る。「我々が民族の問題とか、歴史の中におけるこういう伝承の問題を考える際に、やはりその民族を征服し、あるいは抑圧したときに、歴史家がそれを正当化して叙述し史料として残していく。この果した役割に関してはほぼかむりするわけにはいかないのであって、それは我々が同じ職業にあずかる者として――職業はまさに業ですね。職の業です。こういう歴史という職業にかかわる者として、自分たちの先達や自分たちと同じ職を業とする者に対して、やはり疑ってみる必要がある。そういった恐れは当然あると思います」（一六四ページ、傍点原文）。

ロシア・ソ連「帝国」の崩壊は、歴史の記憶の復讐である。おそらく、この世紀末から当分の間は、この歴史の復讐が、世界の各地で露出するにちがいない。覚悟すべきであろう。

（おおえ　かずみち・西洋文化史）